

(1)

【原文】

〔著東壁〕(一) 上古神人戒弟子後學者爲善圖象。陰祐利人常吉、其功增倍。陽善者、人即相冗答而解。陰〔善〕者(二)、乃天地諸神知之。故增倍也。積德者富、人愛好之、其善自來也(三)。人之所譽、鬼神亦然、因而祐助之。好道者長生(四)、乃與陰陽同其憂、順皇靈之行、天地之性、得其道理。故天祐之也。失者亂天、不好善人也(五)。夫求善以善、無可怪(六)。學以仁得之、道之始也。以德得之、道之中和也。以道得之、上也。

【校勘】經…『太平經』卷一〇〇「東壁圖第一百六十三」

- (一) 經「著東壁」從經
- (二) 陰者…經「陰善者」從經
- (三) 其善自來也…經「其善自來也」
- (四) 好道者長生…經「好道者長壽」
- (五) 天不好善人也…經「故天不祐之也」從經 失者、亂天、不好善人
- (六) 無可怪…經「無可怪者」

【書き下し文】

東壁に著く。上古の神人の、弟子、後の學者を戒めて善を爲さしむるの圖象なり。陰かに人を祐利して常に吉ならしめば、其の功、増すこと倍なり。陽かに善をなせば、人即ち相ひ冗答して解けり。陰かに善をなせば、乃ち天地諸神之を知る。故に増すこと倍なり。徳を積む者は富み、人之を愛好す。其の善自ら來たればなり。人の譽むる所は、鬼神も亦た然り、因りて之を祐助す。道を好む者は長生し、乃ち陰陽と其の憂ひを同じくし、皇靈の行、天地の性に順ひて其の道理を得。故に天、之を祐くるなり。失する者は亂る、故に天、之を祐げざるなり。夫れ善を求むるに善を以てすれば、怪しむべきは無し。學ぶに仁を以てして之を得るは、道の始なり。徳を以てして之を得るは、道の中和なり。道を以てして之を得るは、上なり。

【譯文】

東側の壁に掲げる。(東壁図は)上古の神人が、弟子や後世の道を学ぶ者に善を行うよう告げる図像である。密かに人を助け利益をもたらしては常に縁起よくさせるので、その功績は二倍増しである。あからさまに善をすると、他人がすぐおおく対応するので(功德は)なくなってしまう。密かに善をすると、天地の諸神がこのことを知るため、その功績は倍に増える。徳を積むものは、裕福となり、人々はその人を愛し好む。その善報は自然とやってくるのである。人が称賛することは、鬼神もまたそのようにするのであり、したがって助けるのである。道を好む者は長生し、陰陽と心配事を共にし、天帝の行動や天地の本性に沿って道理を得る。したがって、天はこの者を助けるのである。(道を)失った者は天を乱す。したがって善人を好まない。そもそも、善を求めるに当たって善の態度で臨めば、とがめるべきことはないのである。學ぶに当たって仁の態度で臨み仁を得たならば、それは道の始まりである。徳の態度で臨み徳を得たなら

ば、それは道の中和である。道の態度で臨み道を得たならば、それは上である。

【語註】

○陽善・陰善：

『論衡』雷虛「且有怒則有喜。人有陰過、亦有陰善。」

『千金翼方』<sup>12</sup>「養性禁忌」老子曰、…人為陽善、人自報之。人為陰善、鬼神報之。」

『養性延命錄』<sup>13</sup>『雲笈七籤』<sup>33</sup>「人為陽善、正人報之。人為陰善、鬼神報之。人為陽惡、正人治之。人為陰惡、鬼神治之。」

○學者：

『太平經鈔』乙部卷二「夫學者各為其身、不為他人也。故當各自愛而自親。學道積久、成神真也。與衆絕殊是其言也。」

○富人：

「墨子」非儒下「富人有喪、乃木說、喜曰、此衣食之端也。」

○與陰陽同：

『莊子』漁夫篇「聖人者、與天地合其德、與陰陽同其功。」

張衡「髑髏賦」<sup>14</sup>『藝文類聚』「與況我已化、與道逍遙、與陰陽同其流。」

○皇靈：

『太平經鈔』丁部卷四「叩匄呼天感動皇靈、使陰陽四時五行之氣乖錯、復早上皇太平之君之治、令太和氣逆行。」

○中和：

『禮記』中庸「喜怒哀樂之未發、謂之中。發而皆中節、謂之和。中也者、天下之大本也。和也者、天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉。」

(2)

【原文】

吾本少學而不止、精神念之、涕常欲下。爲此積久、蒙皇天大恩、今日幸得逢天（神）（師）人於曠野（一）。始學若虧、思問小事外浮華也（二）。本求守一養性之法、凡三百首、乃見天師說而無極、故敢問身寧可得長存否（三）。

【校勘】經…『太平經』卷一〇二「神人自序出書圖服色訣第一百六十五」

(一) 今日幸得逢天神人於曠野…經「今日幸得逢天師人於曠野」從經

(二) 思問小事外浮華也…經「司問小事外浮華也」

(三) 故敢問身寧可得長存否…經「故敢問身寧可得長存與」

【書き下し文】

吾れ本と少くして學びて止まず、神を精にして之を念へば、涕常に下らんと欲す。此れを爲し積むこと久しくして、皇天の大恩を蒙り、今日幸ひにも天師人に曠野に逢ふを得たり。始め學ぶに虧くがごとければ、小事を問ひ浮華を外さんと思ふなり。本と守一養性の法、凡そ三百首をを求む。乃ち天師の説きて極まり

無きを見、故に敢へて身の寧ろ長存を得べきや否やを問ふ。

【譯文】

私はもともと幼い時から道を学んで止むことなく、精神を集中して道を念ずれば、常に涙がこぼれ落ちそうになっていた。このようなことが長年続いたところ、皇天の大恩を受け、天師に荒野にて遭遇することができた。当初は、(天師から)学ぶに当たって自身が足りていないようであったので、小さなことを質問してうわべは派手だが実の無いことは除外しようと思っていた。もともと守一養性の法を求めていて、それは全部で三百首であったが、天師が際限なく説くのを目にし、したがって自分の身は長存を得ることができかどうかを思い切って質問したのだ。

【語註】

○精神…

『白虎通』性情「精神者、何謂也。精者、静也。太陰施化之氣也。象火之化、任生也。神者恍惚、太陰之氣也。間稔云支體、萬化之本也。」

○精神念之、涕常欲下

『太平經』卷九十六「念之者、心也、意也。心意不忘肝最仁、故目爲其主出涕泣、是其精思之至誠也。」

(3)

【原文】

子爲天來學問疑、吾爲天授子也。願聞其訣意。以何明之也(一)。今有德之君得吾書、心解行之、與衆賢共議、以化凡民、必與(天)立響相應(二)、是其明證也。吾道以誠成、不設僞言。行已訣矣。吾含此道久(三)、以無可與語者(四)。天冤結有劇、病變不絶(五)、此其悒悒不通(六)。天師何(不)自往與(付)之(七)。「曰位」(位次)不當也(八)。吾(位)職在天(九)、真人(位)職在地(十)。「在」地者出萬物(十一)、故天生者於地養之。故吾傳道於真人。地生君王凡民萬二千物、悉得陽施、從陰中出。故子得傳於人也(十二)。子以吾言不誠信也。夫天雖有所出(十三)、不與人語、(情意同)「難知情」(十四)。吾書承天教令、明若丹青也(十五)。

【校勘】經…『太平經』卷一〇二「位次傳文閉絶即病訣第一百六十六」

(一) 以何明之也…經「以何明之也。其以又明之云何哉」

(二) 必與立響相應…經「必與天立響相應」從經

(三) 吾含此道久…經「吾含此學久矣」

(四) 以無可與語者…經「無可與語者、故不得以時傳之。今使人不知白黑、其過在吾也。今得傳真人問、誠喜甚喜。比若春得登臺、而出見天無異、何乎哉」

(五) 天冤結有劇病變不絶…經「天恐結有劇病變不絶」

(六) 此其悒悒不通…經「此其悒悒不通、得與子言喜也」

(七) 天師何自往與付之…經「天師何不自往與之」從經

(八) 曰位不當也…經「位次不得也」「曰位」從經改爲「位次」

(九) 吾職在天…經「吾位職在天」從經

(十) 真人職在地…經「真人位職在地」從經

- (十一) 在地者出萬物…經「地者出萬物」 從經  
(十二) 故子得傳於人也…經「故子得傳於人」  
(十三) 夫天雖有所出…經「夫天雖欲有所出」  
(十四) 情意同…經「難知情」 從經  
(十五) 明若丹青也…經「明丹青也」

### 【書き下し文】

子、天の爲に來りて學び疑を問うければ、吾、天の爲に子に授けん。  
願はくは其の訣意を聞かん。何を以て之を明らかにするや。

今有徳の君吾が書を得、心解して之を行ひ、衆賢と共に議し、以て凡民を化せば、必ず天と立ちどころに響き相ひ應ず、是れ其の明證なり。吾が道は誠を以て成り、僞言を設けず。行えば、已に訣あり。吾れ此の道を含むこと久しく、以て與に語るべき者無し。天の冤結劇有り、病變絶へざるは、此れ其の悞悞にして通らざればなり。

天師何ぞ自ら往きて之を與へざる。

位次當たらざればなり。吾が位職は天に在りて、真人の位職は地に在り。地は萬物を出だす、故に天の生ずる者、地に於て之を養ふ。故に吾、道を真人に傳ふ。地は君王、凡民、萬二千の物を生じ、悉く陽施を得、陰中より出ず、故に子は人に傳ふるを得るなり。子、以えらく吾が言誠信ぜずと。夫れ天に出だす所有ると雖も、人と語らず、情を知り難し。吾が書は天の教令を承け、明らかなること丹青のごときなり。

### 【譯文】

天師：「あなたは皇天のために來て道を學び、疑いことを質問するので、私は皇天のためにあなたに（教え<sub>4</sub>を）授けよう。」

真人：「どうかその秘訣をお教えください。どのようにして明らかにされたのですか。」

天師：「今仮に徳のある君主が私の書を手に入れ、会得してその内容を実践し、多くの賢人とともに議論し、それによつて一般の民衆を教化したならば、必ずや皇天とたちどころに反応し合う、これがその明確な証拠である。私の道は誠によつてできており、虚言などは含んでいない。実践がすでに秘訣であろう。私はこの道を長らく抱いていて、ともに（この道について）語る事ができる者がいなかった。皇天の恨みの凝結は激しく、病氣や異変が絶えないのは、これを悶々と思ひ、解消されないからである。」

真人：「天師はどうして自ら（地上に）赴いて（その道を）与えないのですか。」

天師：「私の階級が匹敵しないからである。私の職位は天に在るが、真人の職位は地に在る。地は万物を生み出す、したがつて天が生み出したものは地にて育てられるのである。よつて、私は道を真人に伝えるのである。地は君王や民衆や一万二千種の物を生み出し、すべてに陽氣の作用を受けさせ、陰氣の中から出させる。したがつて、あなたは人に伝えることができるのである。あなたは私の言葉を誠信でないと思ふであろう。そもそも天が物を生み出すことがあるといつても、人と語らないので、その事情を知ることには困難である。私の書物が皇天からの教令を承けていることは、丹青のように明らかである。」

### 【語註】

○丹青：

『太平經鈔』庚部卷七「吾書中善者、悉使青首而丹目、何乎。吾道乃丹青之信也。青者生、仁而有正。赤者太陽、天之正色。」

(4)

【原文】

天數之始也、是故天地未分之時、積氣都合爲一、分爲二、成夫婦。天下施於地、懷妊於玄冥、字爲甲子。布根東北、丑與寅、始見於卯、畢(生)東南(一)、辰與巳。垂枝於南、養於午。向老西南、未與申。成(與)西方、日入酉。畢藏西北、戌與亥。故數起於一而止於十者(四)、(五千)(十千)之始(五)、五行之本也。數(一以)(以一)乘十(六)、百而備是(七)。故天生内(百且)(八)、故畢終。是故斗建於辰、破於戌。建者立也。故萬物欲畢生。破者敗也。萬物畢死於戌。數天地八方(九)、十而備。陰陽建破、故以此往來復其故(十)、隨(天)斗所指以明事(十一)。吾書乃爲除害氣、故(曰)象天爲法(十二)。

【校勘】經『太平經』卷一〇二「經文部數所應訣第一百六十七」

- (一) 畢東南…經「畢生東南」 從經
- (二) 向老西南…經「尚老西南」
- (三) 成與西方…經「成西方」 從經
- (四) 故數起於一而止於十者…經「故起數於一、十而止。十者」
- (五) 五千之始…經「十千之始」 從經
- (六) 數一以乘十…經「數以一乘十」 從經
- (七) 百而備是…經「百而備是也」
- (八) 故天生内…經「故天生内百且」 從經
- (九) 數天地八方…經「數從天地八方」
- (十) 故以此往來復其故…經「以此往來復其故」
- (十一) 隨斗所指以明事…經「隨天斗所指以明事」 從經
- (十二) 故曰象天爲法…經「故象天爲法」 從經

【書き下し文】

天は數の始なり、是れ故に天地の未だ分かれざるの時に氣を積みて都て合して一と爲り、分かれて二と爲り、夫婦と成る。天は地に下施し、玄冥に懷妊し、字して甲子と爲す。根を東北に布く、丑と寅なり。始め卯に見え、畢く東南に生ず、辰と巳なり。枝を南に垂れ、午に養はる。老に西南に向かふ、未と申なり。西方に成り、日、酉に入る。畢く西北に藏す、戌と亥なり。故に數は一より起りて十に止む者にして、十千の始なり、五行の本なり。數は一を以て十に乗ぜば、百にして是を備ふ。故に天は内に生ずること百日にして、故に畢く終はる。是れ故に斗は辰に建ち、戌に破る。建は立なり。故に萬物は畢く生ぜんと欲す。破は敗なり。萬物は畢く戌に死す。數は天地八方にして、十にして備はる。陰陽は建て破る、故に此の往來を以て其の故に復す。天斗の指す所に隨ひて以て事を明らかにす。吾が書は乃ち爲に害氣を除く、故に天を象りて法と爲す。

【譯文】

天は數の始まりである、したがって天地がまだ分かれていない時に氣を集積してすべて合して一氣となり、分かれて(陰陽)二氣となり、夫婦となった。天は地に対して下方に(陽氣を)施し、北方にて懷妊させるが、「甲子」という呼び名が付けられている。(万物の)根を東北に延べ布くが、これは丑と寅の時(十二月

と正月)である。始め卯(東方、二月)に姿を現し、すべて東南にて出そろうが、これはと辰と巳の時(三月と四月)である。南方に枝を垂れ、午の時(五月)に生育される。西南方へと成熟に向かうが、これはと未と申の時(六月と七月)である。西方にて成熟し、太陽は西の位置(八月)に入る。(万物は)すべて西北にて貯蔵されるが、これはと戌と亥の時(九月と十月)である。したがって、数は一から始まって十にて終わるものであり、十千の始まりであって、五行の根本なのである。数は一を用いて十にかけていくと、百になって完備する。したがって、天がその中に物を生じて百日間すると、(その物の生は)すべて終わるのである。したがって、北斗七星は辰(三月)に立ち、戌(九月)に敗れるのである。「建」とは「立」のことである。したがって、万物はみな生まれ出ようとするのである。「破」は「敗」のことである。万物はみな戌(九月)に死ぬのである。数とは天地八方のことであって、十に至るとすべて備わる。陰陽は立ったり敗れたりする、したがって、このように往来することでもとに戻るのである。北斗七星が指すところに従って事物を明らかにする。私の書物はそのために害気を除く。したがって、皇天をなぞらえてと法としたのである。

【語註】

○玄冥：

『白虎通』五行「時為冬、冬之為言終也。其位在北方。其音羽、羽之為言舒、言萬物始孳。其帝顓頊、顓頊者、寒縮也。其神玄冥、玄冥者、入冥也。其精玄武、掩起離體泉、龜蛟珠蛤。」